「野球移民」の誕生
―ドミニカ共和国における移民像の創出過程―

窪田　　暁

国立民族学博物館外来研究員

本稿の目的は、ドミニカ共和国（以下、ドミニカ）の移民送りだし社会としての面、およびトランスナショナルに展開する移民と故郷の人びととの相互交渉に注目し、そのなかから誕生した「ドミニカンヨルク」というイメージにドミニカ社会のどのような価値観が投影されているかについて考察するものである。そのうえで、このような相互交渉にもとづき生みだされた移民イメージが野球選手に移民としての役割を担わせることに結びついたことを明らかにする。

トランスナショナルな現象を扱う先行研究では、故郷の人びとを移民からの影響を一方的にうける（うけない）対象として捉えてきた。そこで描かれるのは、移民からの影響をうけて変容するコミュニティや非移民の姿であった。しかし、多くの人びとは移民からの最低限の送金でなんとか生活を送り、バリオ（共同体としての町、村）内に格差が拡大しないような節度あるふるまいを実践している。それを支えているのが、地域社会の伝統的な規範意識や価値観である。

しかしながら、現在のドミニカをめぐる経済状況は厳しく、より多くの送金を受けとりたいというのがバリオの人びとの本音であることも事実である。そうした状況のなかで、年々増え続ける移民に対して、一時帰国の際に華美で散財のかぎりを尽くす「ドミニカンヨルク」というステレオタイプ・イメージを創りあげ、国際電話やfacebookといったトランスナショナルな相互交渉を通して、移民にも「ドミニカンヨルク」像を演じさせることに成功したのである。さらに、こうした「ドミニカンヨルク」の役割を、野球選手に担わせることによって、今度は「野球移民」を誕生させることに繋がっているのである。

そこで本稿は、こうしたステレオタイプ・イメージの創出を、二国間にまたがるトランスナショナルな相互交渉の過程から明らかにする。そのうえで、伝統的な規範意識や価値観を武器に、新自由主義経済が蔓延する予測不可能で不安定な社会を生きぬくドミニカの人びとの生活戦略の在りようを示したい。

キーワード：トランスナショナリズム、送金、ドミニカンヨルク、野球移民、移住要因

1. はじめに
2. ドミニカ移民の歴史と社会的背景
2.1 移民の発生要因をめぐる先行研究の整理
2.2 ドミニカ移民の歴史と発生要因
2.3 移民の増加と移動経路の多様化
3. トランスナショナル・コミュニティ
3.1 移民送りだし社会における送金の実態
3.2 送金から浮かびあがる地域社会の論理
3.3 故郷の人びとが生みだす「ドミニカンヨルク」
4.「野球移民」の誕生
4.1 MLBのリクルート・システム
4.2 ドミニカの人びとにとっての野球
4.3 大リーガーによる分配
5. おわりに

1. はじめに

本稿の目的は、ドミニカ共和国（以下、ドミニカ）の移民送りだし社会としての面に注目し、トランスナショナルに展開する移民と故郷の人びととの相互交渉について考察するものである。そのうえで、相互交渉の結果、伝統的な価値観を投影して生みだされた移民像が野球選手に移民としての役割を担わせることに結びついたことを明らかにする。

ドミニカはアメリカのメジャー・リーグ・ベースボール（MLB）に多くの大リーガーを送りだす国として知られている。2013年9月時点で、133人と大リーガー全体の11％を占め、外国出身選手のなかでは最も多い数字となっている。ちなみに、第2位のベネズエラが92人、第3位がプエルト・リコとなっており、カリブ海地域から多くの大リーガーが誕生しているのがわかる（表1）。こうしたスポーツ選手の国境を超える移動については、マグワィヤらが「スポーツ移民（sports migrants/the sports labor migration）」と呼び、プロ・スポーツがグローバル資本と結びつく形で地球規模に拡大していく現象であるという視点から、世界経済システムの文脈のなかで論じられてきた（Bale and Maguire eds. 1994; Maguire 1996）。

ドミニカ野球に関する先行研究もこうした研究の流れのなかで登場する。クラインは、アメリカ発祥の野球がドミニカに伝播し、多くの野球選手をMLBへ供給するようになった過程を、アメリカによる政治経済的支配の歴史と絡めて

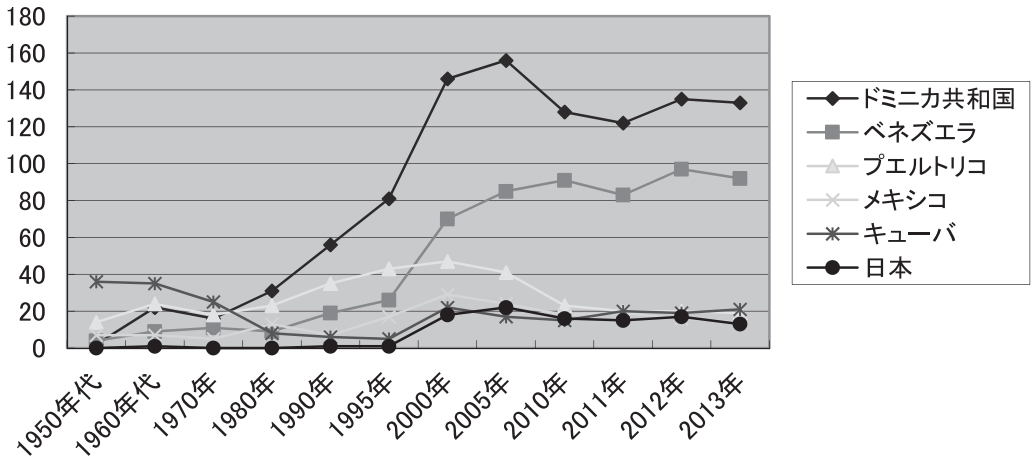

表1　MLBにおける外国出身選手数の推移（baseball-reference.comのデータをもとに筆者作成）

論じている。クラインは、アメリカの「国技」である野球が、ドミニカ人によってアレンジされ、アメリカへの政治経済的支配に抵抗する手段となり、ナショナル・プライドを駆りたてると述べる。その背後には、アメリカに対する経済的文化的な憧れとナショナル・プライドを表明したいというドミニカ人の複雑な感情が隠されており、それがアメリカ文化への抵抗と受容が錯綜する闘争の場となって表象されるのが野球なのだという（Klein 1991: 111–112, 152–153）。こうした研究の多くは、マクロな視点からスポーツのグローバル化を論じているために、ドミニカの人びとと野球の関わりを固定的に捉える危険性をはらんでおり、MLBのあらゆるレベルにおいてドミニカ出身の野球選手が誕生するようになった要因についての説明としては不十分であるばかりか、現地の人びとの主体的な選択は見えてこない。そのため、本稿ではドミニカから大リーガーが誕生する要因をドミニカの移民送りだし社会の面に注目し、多くの移民を送りだす志向性をもつようになったコミュニティが「野球移民」という新たな移民形態を生みだすにいたる過程を見ていくことにする。

本稿では、まず国際移民研究が移民の発生要因をどのように分析してきたかを、ドミニカからアメリカに渡る移民の歴史を参照しながら整理し、その移住要因と移住経路の変化について記述する。次に、移民からの送金をめぐるコミュニティの反応からドミニカに特有の所有をめぐる規範意識を明らかにする。続いて、トランスナショナルに展開する移民と故郷の人びとの相互交渉を通して創られる移民像が、地元出身の野球選手に移民としての役割を担わせることに繋がっていることを指摘し、「野球移民」という用語を使用する必要性について考察する。

なお、本稿で使用するデータは、2005年から2013年までのあいだに（計8回・約2年間）断続的に実施したドミニカ・バニ市ロス・バランコネス地区（以下、R地区、図1）ならびにアメリカ・ペンシルバニア州ヘーズルトン市での参与

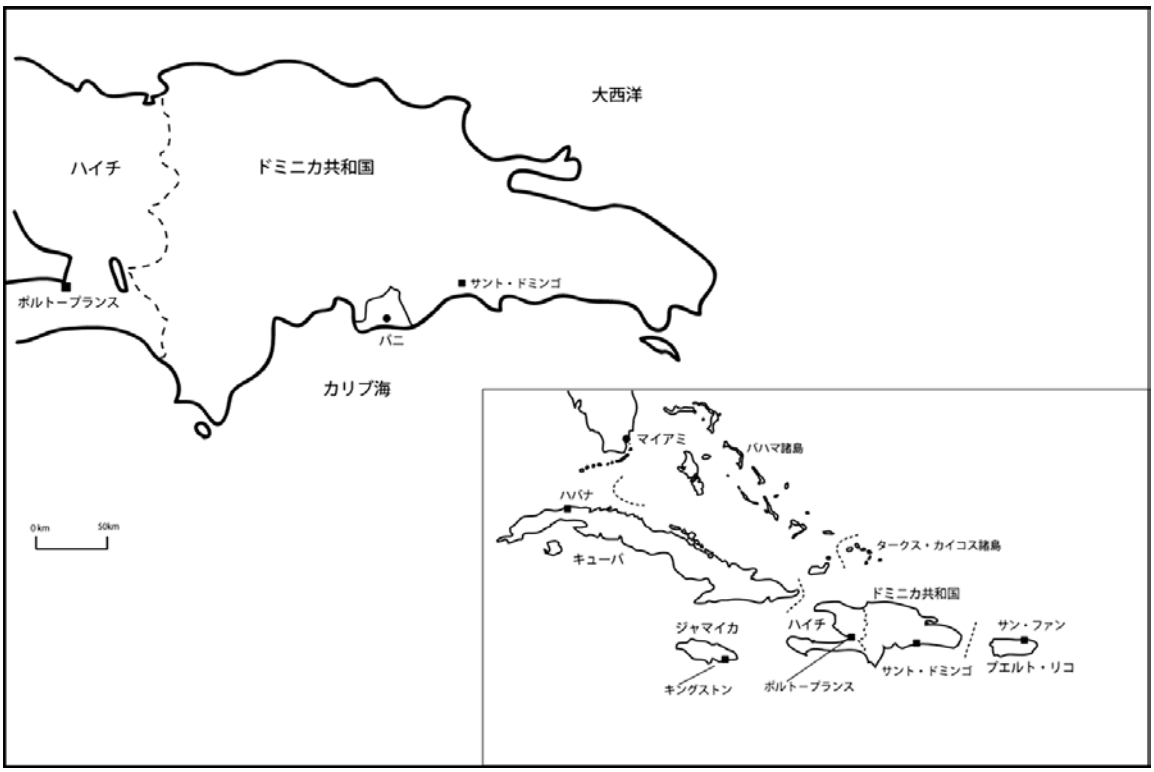

図1　ドミニカ共和国地図（筆者作成）

観察とインタビューによるものである。

2. ドミニカ移民の歴史と社会的背景

2.1 移民の発生要因をめぐる先行研究の整理

移民の発生要因の分析で長らく影響力をもってきたのは、19世紀の地理学者ラベンスタインが提唱したプッシュ・プル理論にもとづく説明である。カースルズらによると、人びとを自国から離れるようにしむける「プッシュ要因」と人びとをある受け入れ国へと引きつける「プル要因」が結びつくことで移民が生じるとするのがこのモデルである。この理論は、故国に残った場合と別の国に移った場合の相対的コストと利益を合理的に比較した末に、移民として移動しようとする個人の意思決定を強調する（カースルズ・ミラー 1996: 20–21）。しかしながら、均衡論とよばれるこのモデルは一部の国内移動についてはあてはまるものの、あまりに単純すぎて、現実の移動現象を説明することは困難である。たとえば、ドミニカからアメリカへの初期の移民は、最貧層の人びとではなく、中間層の人びとが多かったことが報告されており、コストと利益を基準にした分析からは説明がつかない（Grasmuck and Pessar 1991）。

このモデルが、個人の合理的選択の結果としての移動を強調しすぎたことから、それへの批判として、次に個人の所属する集団や社会構造に注意が払われるようになった。そこでは、移民コミュニティを中心とした社会ネットワークを利用した移住システムの存在が移民の発生要因としてあげられている（Portes and Bach 1985）。この理論と交錯するように、歴史学や社会学、そして人類学の分野においても移民をいかに受け入れ社会に統合するかという点に焦点をあてる研究が主流となり、移民の選別をおこなうアメリカ政府の移民政策や労働市場への編入に関心が寄せられてきた（Brettell and Hollifield 2000: 15）。他方、政治経済やグローバル資本の影響との関連において移民の発生要因を分析する研究がなされると同時に、出身社会の社会構造の変化に注目するものも現れるようになった（Georges 1990）。これらの研究の特徴は、出身社会と受け入れ社会双方の政治経済的背景をふまえたうえで、国家や資本主義経済という枠組みのなかで移住要因を考察しようとするものである。しかしながら、マクロな視点から統合や同化を前提として移民現象を論じているために、移民個々に異なる移動要因や移住先での生活は捨象されるといった問題を抱えていた。

サッセンは急速に拡がるグローバル化に関して考察し、国民国家を所与のものと捉えてきた従来の移民研究を批判的に検討した。サッセンによると、国家ごとに統制していた入国管理政策の領域においても国際人権レジームや超国家的法レジームなどの新たな規範性の拠点（国際人権規約やNGOなど）が登場しており、国民国家単位では説明が不十分だという。また、第三世界における自由貿易区（フリーゾーン）で雇用された女性が、移民受け入れ国における女性移民の雇用の潜在的プールとなる傾向があることを指摘し、移民の発生要因を世界的なつながりのなかで構造的に理解しなければならないと論じている（サッセン 2004: 65–107, 199–201）。実際に、ドミニカで私が話を聞いたフリーゾーンで働く女性も、定期収入のある生活を経験したことで、アメリカへの移民願望をもつようになったと語っている[1)]。

1980年代以降、人類学・社会学を中心に移住先の国と出身国のあいだを頻繁に往来する移民現象が報告されるようになった。この現象を分析するために現れたのがトランスナショナリズムの概念である。それまで、移民は仕事が終われば出身国に帰るか、最終的に受け入れ国に同化するものと考えられてきた。しかし、二重国籍など双方の国に帰属意識をもち、国境を越える社会的ネットワークを維持し続けている実態が報告されるようになった（上杉 2004: 12–13）。ベルトベックは、トランスナショナリズムを「国

民国家の境界を越えて広がる人びとや機構の多元的紐帯や相互交渉」と明確に定義したうえで、これまでのトランスナショナル研究の枠組みを整理し、「社会形態学」「意識」「文化の再生産」「資本の経路」「政治参加の場」「領土・場所性の再構築」の6つに分けている（Vertoveck 1999: 447–457）。ベルトベックの論文が掲載されたのは、トランスナショナリズムを特集した*Ethnic and Racial Studies* 22 (2)であるが、そのなかでポルテスらもこの概念の整理をおこない、方法論的な立場から分析単位を個人と彼／彼女を支えるネットワークとして明確にし、経済・政治・文化の3つの領域に区別して考えることを唱えている。また、多国籍企業のような強力な組織による（上からの）ものと、移民や母国のカウンターパートによる（下からの）ものに区別している（Portes et al. 1999: 217–224）。

トランスナショナリズム研究が従来の移民研究と大きく異なる点は、受け入れ社会と送りだし社会双方を分析の対象とするだけにとどまらず、移民と故郷の人びとのあいだで創出される国民国家の枠組みを超えた新たな社会空間を考察する点にある。次節では、ドミニカ移民の歴史と移民の発生要因についてドミニカ移民研究を参照しながら概観し、本研究の視座を示したい。

2. 2　ドミニカ移民の歴史と発生要因

ドミニカの人口は、9,927,320人（2010年 世界銀行）で、そのうちアメリカに暮らす移民の数は、1,414,703人である（2010年 アメリカ国勢調査）。しかしながら、統計にはあらわれない非正規滞在者の数をふくめると、実数は200万人以上と推定されている[2)]。これに加え、スペインやベネズエラ、パナマやプエルト・リコなどアメリカ以外の地域に暮らす移民をあわせると、人口のおよそ3分の1にあたる300万人近いドミニカ人が海外で生活していることになる。彼らからの送金額は、日本円にして年間3,000億円にまでのぼり、ドミニカがいかに移民からの送金に依存する社会であるかがわかる（2012年 ドミニカ中央銀行）。実際、地方都市で調査をしていても、ほとんどの世帯が移民として海外で暮らす家族・親類をもっており、彼らからの送金が家計を支えていることが明らかになった。

アメリカに渡るドミニカ人の流れは、トルヒージョ独裁政権崩壊後[3)] の1965年から本格的にはじまり、現在も増加をつづけている。初期の移民の多くは、都市部の中間階級が占めていたが、80年代のドミニカ経済の後退で農村地域の人びとや都市下層階級まで拡大し、絶対数が増えるとともに、移民の性質も多様化が進んできた。移民の増加の要因について、グラスマックとペッサールは多次元的な4つの要素をあげて分析している。ひとつめの要素は、アメリカによるドミニカの経済支配の影響についてである。ドミニカ経済がアメリカ資本に依存することによって国内市場の成長は必然的に妨げられ、貧富の拡大を招いたこと。ふたつめは、ドミニカの国内政策、特に農業政策の失敗が農家の減少と地方の衰退を招いたこと。3つめは、国内の教育水準上昇が、もともと移民となる傾向の強い中間階級を増加させたこと。最後に、性差や家族状況の変化が移民を誘発させた点を指摘する。つまり、女性がニューヨークにおいて低賃金であれ、雇用制度に組みこまれたことによって、これまで母国において、父や夫が労働で得たものを背景に成立させていた管理力を減少させることを促し、ドミニカ女性が移民先で満足感を得たことが移民の誘発を招く要因となったというのである（Grasmuck and Pessar 1991: 199–202）。また、ペッサールは、ドミニカに特有の拡大家族のネットワーク（*cadena*）が、アメリカに到着したばかりの移民を庇護することにより、連鎖的に多くの移民がアメリカへと渡る要因となっていることを明らかにし、社会ネットワーク論による移民発生の要因分析をおこなった（Pessar 1995）。このように送りだし社会・受け入れ社会双方における社会経済の特徴に焦点をあて、移

民政策、社会ネットワーク、世帯構造、ジェンダー・イデオロギーの考察をおこなう研究がこれまでのドミニカ移民研究の中心をなしてきた（c.f. George 1990; Hernandez 2002）。

ドミニカ移民に関する主要な研究は、アメリカ労働市場へのドミニカ移民の編入や移民政策といった社会経済的な特徴に集中してきたが、これは国際移民研究自体が、移民をいかに受け入れ社会に統合するかという点に焦点をあててきたことと無縁ではない。この点において、ドミニカ移民研究も大きな移民研究の流れとほぼ同じ道をたどってきたと言えるであろう。ただし、移民研究のトランスナショナリズム研究への移行に、ドミニカ移民研究の成果が初期の段階から大きく関わっていたことは注目に値すべきことである。たとえば、「下からのトラスナショナリズム」という表現を使用し、グローバル資本や国家による「上からの」影響ではなく、個人や集団のレベルから二国間にまたがる力関係や文化の再構築、あるいは経済活動の相互交渉の過程を捉えようとしたグアルニーソらの研究や（Guarnizo et al. 1998）、いわゆる「密入国移民（illegal border crosser/unregulated migration）」についてもはやくから扱われていたのである（Hernandez and Lopez 1997; Pessar 1995）。

グアルニーソやポルテスらの研究がトランスナショナルな現象の分析単位を個人にすえ、二国間にまたがる政治や経済活動のひとつの面だけに注目する傾向にあったのに対し、レビットは、コミュニティという中間レベルの視点から考察することで、移民の影響をうけてコミュニティ内の政治や経済、あるいは世代間の関係やジェンダー・イデオロギー、学校教育などが変容する過程を「社会的送付（social remittance）」という概念を使用して分析した（Levitt 2001）。このように、トランスナショナルな現象を扱う研究者は、移民の日常的実践や移民からの影響をうけて変容するコミュニティの姿を描くためにトランスナショナリズムの概念を使用してきた。しかしながら、移民の移住要因については社会経済的な背景や移民社会とのネットワークが強調されることに変わりはなく、送りだし社会の文化的な背景にまで踏み込んだ考察は見られないという問題は残されたままである。また、トランスナショナリズム研究の多くが、移民からの影響を強調しすぎたことで、送りだし社会の人びとの実践や価値観については触れられず、受動的で変化する（変化しない）存在として扱われるという欠点を有していた。

そのため本稿では、移民の発生要因をトランスナショナルに構築される社会的ネットワークの面からだけではなく、地域社会の価値観や規範意識に注目する。そのうえで、地域社会の論理を内面化して日常生活をおくる人びとが移民からの影響を一方的にうけているのではなく、生活戦略として移民との相互交渉をおこなっている実態について、記述・分析を試みる。

2.3　移民の増加と移動経路の多様化

ドミニカでは多くの発展途上国同様、グローバリゼーションの進展とともに世界に広がる新自由主義経済がもたらす社会的不平等の拡大といった問題が、特に貧困層の人びとに深刻な影響を及ぼしている。産業構造が伝統的な農業から、観光業中心のサービス業やフリーゾーンにおける製造業へと変化するなかで、地方から都市への移住が盛んにおこなわれてきた。しかしながら、外貨獲得と雇用創出を目的に進められた観光開発やフリーゾーンへの企業の誘致は、経営の主体を旧宗主国であるスペインやアメリカの資本家が独占するというポスト植民地的状況をより強化し、社会的不平等の解消につながらないばかりか、環境破壊や地域社会の崩壊、都市郊外のスラム化といった新たな問題まで引きおこしている。

こうした背景から、現在のドミニカでは国民総移民化とでも呼べるほどアメリカへの移民熱が高まっている。私の調査地でも、調査をはじ

めた頃には移民願望などなかったものまでが、アメリカに渡るようになっており、調査で訪れるたびに知りあいの数が減っているのが現実である。前節で述べたように、初期の移民の多くは都市部の中間層が占めていた。それは、国内の経済状態に見切りをつけ、アメリカで稼いだドルを元手に新たにドミニカで商売をはじめようとするものが多かったからである。80年代に入り主要農作物である砂糖の国際価格が低下すると、地方の農村から首都へ移住する人びとが増加し、首都サント・ドミンゴの雇用環境は飽和状態におちいる。地方出身者が首都での生活を経験した後に、アメリカをめざすケースが増加しはじめるのは、この頃からである（Hernadez and Lopez 1997: 63）。現在では、首都を経由せずに直接、アメリカに渡るのが一般的になっているが、それはここ数年の物価の上昇と景気低迷の影響が深刻で、首都で働き口をみつけることすら困難になってきているからである。

ここで、ドミニカからアメリカに渡る方法と経路について、まとめておきたい。ドミニカ人が家族の呼び寄せ以外の方法でアメリカに入国を希望する場合、査証が必要となる。申請に必要な条件は、1）不動産や車を所有していること、2）書類上の婚姻関係にある配偶者がドミニカに居住していること、3）定期的な収入のある仕事に就いていること、4）ドミニカ国内に子どもが居住していること、5）銀行口座に一定額以上の預金があること、である。すべての項目に対して証明する書類を用意しなければならないため、初期の移民に中間層が多かったことは当然ともいえる。アメリカ領事館がこのような条件を設けているのは、これらの条件を満たしているものは、滞在許可の期限を過ぎてもそのままアメリカに留まることはないと考えるからである[4]。

上記の書類をそろえることができない貧困層にとって、選択肢は限られてくる。アメリカの正規滞在資格をもつ人物と結婚するか、査証をもたずに密入国するかである。前者は、1）観光や仕事でドミニカを訪れるアメリカの市民権をもつ男性とドミニカ人女性が結婚する、2）アメリカの滞在資格をもつドミニカ人が一時帰国した際に、ドミニカ人と結婚して連れて行く、3）アメリカにいる親類や友人が偽装結婚の相手を探して、配偶者資格で渡米するパターンに分けられる[5]。一方の後者の密入国は、1）隣島のプエルト・リコに*yola*（ジョラ）とよばれる小型ボートで渡り、プエルト・リコ人としてアメリカへ渡る、2）メキシコの査証を取得し、メキシコ経由で、陸路アメリカの国境を越える、3）比較的、査証が取得しやすいパナマやコスタ・リカなどの中米に空路で入国し、メキシコ経由で陸路アメリカをめざすパターンである。近年は、メキシコの査証申請も厳しくなったために、3）の経路を選択するものが増えている。ここで、*yola*での密航を経験した男性の話から、それがいかに過酷な経験であるかをみておきたい。

事例1

バニ市R地区に暮らすベヘ（42歳、男性）は、建築現場の日雇い労働者である。（2011年当時）。かつては、友人と肉屋を経営していたが、1年ももたずに経営がいきづまり、店をたたんだ。2003年、アメリカの査証を申請したが、面接の日をすっぽかしたためにアメリカ行きの機会を逃す。その後、景気は悪化し続け、建築現場の仕事にありつけない日が増えだしたことからアメリカ行きを決断する。別れた妻に毎月支払うふたりの子どもの養育費が払えない月が増えてきたからである。2005年のことだった。

gente（ある人の意）とよばれる斡旋人に手数料4万8,000ペソ（約12万円）[6]を支払い、ドミニカ北東部の都市ナグア郊外の浜辺に指定された時刻（夜7時）に行くと、同じ*yola*（ボート）に乗りこむ人たちが集まりかけていた。斡旋人からの注意を守り、パンをいれたビニール袋以外はもたずに、ジーンズとTシャツだ

けの軽装だった。暗くなるまで浜辺近くの草むらに身を潜めるように言われた。完全に太陽が沈み、一面が闇に包まれると、ボートには100人以上の密航者がぎゅうぎゅうづめに押しこめられた。最後に船頭がふたり乗り込むと、モーターのエンジンを始動させ、ボートはゆっくりと東に向けて動きだした。ボートは座る場所を確保するのが精一杯で身動きがとれない。波に揺られて気分が悪くなったものが嘔吐する匂いで、連鎖的に船酔いするものがではじめる。小便をする時もすぐ隣に人がいるのを気にしながら、ボートが揺れるのと格闘しなくてはならなかった。深夜、島がフリーフォーレス（豆）くらいにしか見えない場所にいると、経験したことのない恐怖におそわれた。これまでに何度も*yola*による密航で命を落としたものの話は聞いていた。テレビでは、密航をやめさせるためのキャンペーンが繰りかえし流れているし、バチャータ（ドミニカ音楽）でもプエルト・リコへの密航を歌った曲がヒットしたこともあった。ボートが転覆して、サメに喰いちぎられる自分の姿が頭にうかぶ。みんな同じようなことを考えているのか、口を閉ざしている。空腹とまわりの人の汗の匂いで気分が悪くなるたびに、ボストンでの生活に想いをはせ、自分が送った服に子どもが喜んでいる顔を想像した。太陽がのぼると日差しがきつく、脱水症状で倒れるものがでた。もし、ボートが遭難したら自分も死ぬかもしれない。船頭に言われるまでもなく、誰もがボートに入ってくる海水を板きれで汲みだし、着ていたシャツに吸わせては絞る作業に没頭した。神に祈る声がそこらじゅうから聞こえた。

二日目の夜が明ける頃、プエルト・リコの島が遠くに見えてきた。死なずにすんだと思った。でも、それまでだった。国境警備隊のサーチライトがボートを照らしだした。（2010年9月）

こうした過酷な行程にもかかわらず、毎年1,000人を超える人びとが*yola*による密航を試みている。近年では、メキシコ経由で陸路アメリカをめざすものが増加するようになったが、国境警備隊にみつからないように、闇夜にまぎれ1週間かけて国境を超えていく。こうした密入国でアメリカをめざす方法は、ドミニカでは*con machete*（山刀持参の旅）と敬意をこめて呼ばれている。

ここまでみてきたように、近年の新自由主義経済の影響により経済格差が拡大し、移民となる人びとを増加させることになった。そして、アメリカの査証を取得できない貧困層がアメリカへの渡航手段として密入国を選択することで、移動経路も多様化が進むようになったのである。

3. トランスナショナル・コミュニティ

ここでは、移民を送りだすコミュニティにおいて、移民と故郷に残る人びとが共有する規範や価値観を介した送金をめぐる相互交渉を通じて、移民のイメージが形成されていく過程を具体的な事例に沿ってみていくことにする。

3. 1　移民送りだし社会における送金の実態

本題に入るまえに、移民からの送金の影響について扱った研究を正負の両面に分けて整理しておきたい。送金が途上国である送りだし社会の開発や民主化に貢献する事例を取りあげた研究が多くなされている。教育・医療の現場やコミュニティ開発に送金が投資されることで、地域社会の発展に貢献しているというものである（de la Garza and Lowell 2002）。一方、送金による負の影響については、格差の拡大や消費経済の進行で伝統的な生活が変容するといった事例が報告されている。トンガやサモアといったポリネシア諸島では、海外移住が盛んにおこなわれており、彼らからの送金に依存する社会はMIRAB社会[7]とよばれている。須藤によると、トンガでは移民からの送金が住環境の近代化、

日常生活の食料購入や宗教上の寄付、社会的交際および交際費にほとんどがあてられているという。その結果、消費経済が進行し、農業経済の生産が衰退し、輸入食料品を購入することによって物価を押しあげ、ますます送金に依存することになる。このように、送金と消費生活との悪循環を特徴とする経済を「レント（不稼得）収入依存」社会、あるいは送金が生産活動に投資、活用されずに社会の活力が失われることから「送金腐敗」と呼ばれる（須藤 2008: 33）。

国家をあげて移民の送出に力をいれることで知られるフィリピンの農村で送金収入の影響について調査をおこなった長坂によると、世帯間の収入格差は、その世帯の耕地所有規模や農業経営規模よりも、送金収入および海外からの年金収入があるかないか、次いで給与所得があるかないかに左右されるという（長坂 2009: 206）。また、ドミニカの移民送りだし社会の事例では、農作物の市場価格が低迷するなかで、一日50ペソ（4ドル）の稼ぎのために炎天下での農作業をするよりも、ボストンに暮らす家族からの月50ドルの送金に頼る生活を選択する人びとが増えていることが報告されている（Levitt 2001: 86）。

これらの送金をめぐる正負の影響を論じた研究は、いずれも海外に暮らす移民からの送金によって、故郷の人びとの生活が影響をうけるものとして捉えられる傾向にあった。しかし、私が実施した世帯調査の結果からは、移民からの影響（とくに、送金）を一方的にうけているというよりは、むしろ送金によってなんとか生きのびようとする人びとの生活戦略やコミュニティ内に格差が拡大することを回避するような力学が働いている様子が観察された。以下では、その様子をより具体的にみていきたい。

調査地は、ドミニカの首都サント・ドミンゴから西に約70kmはなれたペラビア（*Peravia*）県バニ（*Bani*）市のバリオ（共同体としての町、村）、ロス・バランコネス（以下、R地区と略記）である（ペラビア県は人口約17万人、バニ市は約10万人）。地理的には、北部の山裾から南部のカリブ海にいたるまでの平地部740km^{2}を有するバニ市の北西部に位置している。バニ市はペラビア県の県庁所在地のため、役場だけではなく公設市場や金融機関、商業施設があつまっている。国内でも年間をとおして平均気温が高いペラビア県では、サトウキビ、ユカ（キャッサバ）、プラタノ（食用バナナ）、マンゴーといった熱帯作物が栽培されているが、農地の大半はバニ市郊外にある。一般には、中心部を東西に貫く幹線道路を境に、南側が富裕層、北側が貧困層の集住地域であると認識されている。実際、北側地域のインフラ整備の遅れと麻薬売買や強盗事件が多発する社会環境を嫌い、富裕層が南側地域に住居をかまえているために、住環境の差は歴然としている。

R地区は、幹線道路の北側地域に位置する人口約5,500人のバリオである。バリオの歴史は浅く、1979年9月のドミニカ観測史上最大といわれるハリケーン・デーヴィッドによって壊滅的な被害をうけたバニ市の人びとの居住先として政府が土地と建築資材を提供し、移住希望者みずから共同で家をつくりあげたのがはじまりである。当初は、3つの通りに50戸あまりの家族が住むばかりであったが、現在では11の通りに5千人以上が暮らす地区となっている。このバリオの公共施設としては、カトリック教会、プロテスタントのセブンスデイ・アドベンティスト派の教会がひとつ、同じく福音派の教会が3つ、小・中学校、学校付属の診療所、そしてバリオ出身の大リーガー、ミゲル・テハダ（以下、テハダ）が建設した野球場がある。

バリオの世帯主の職業は、建設業従事者が最もおおく、それ以外ではソーナ・フランカ（フリーゾーン）の工場労働者、家政婦、養鶏場での飼育、公設市場で商いをするもの、モトコンチョ（バイクタクシー）の運転手、コルマド[8]（通りごとにある食料品や生活雑貨をあつかう小商店）の従業員など多岐におよぶ。首都までバスで1時間

という地理的要因から、首都で働くものもいる。警察、軍隊、トラック運転手、首都のコルマドやリゾートホテルの従業員などである。水道・電気は、バリオがつくられたときに住民と市が設備工事を施したが、ほとんどの住民が電気料金をしはらわなくなったために、現在では夜の10時から朝の7時まで、それ以外は不定期に供給される状態にある。バッテリー充電式インバーターを所有している世帯は、コルマドをのぞくとバリオ内に7軒あり、アメリカで暮らす移民から比較的高額の仕送りをうけているか、野球選手としてかつて高額の契約金を手にしたものにかぎられる。バリカンを使う散髪屋は4軒あり、うち2軒がインバーター、残り2軒はガソリンによる手動発電機を使用している。

海外からの送金について世帯調査を実施した結果、8割近くの世帯が月に100ドル程度の送金をうけており、そのおかげで生活が可能となっていることが明らかになった。バリオの送金事情の特徴として以下の点があげられる。1）世帯主の多くが日雇いの建設労働に従事しているが、毎日仕事にありつけることはなく、海外からの送金は家計を維持するうえで不可欠となっていること、2）アメリカやスペインに暮らす家族から送金をうけていること、3）子どもの父親にあたる人物（元夫）から、養育費という名目で送金をうけていること[9]、4）大リーガーからの定期的な送金をうけるものがいることである。

このようにほとんどの世帯で送金をうけとっているにもかかわらず、先行研究でみられたような消費経済の進行や、送金による世帯間の収入格差の拡大といった「負の影響」はみられなかった。理由として、貧困層が多いR地区のほとんどの世帯は、生活に必要最低限の金額しかうけとっておらず、住環境を整備したり、教会に寄付をするといった余裕はない。また、送金額がいずれの世帯においても100ドル程度と似かよっていることから、そもそも世帯間で収入の格差が生じないようになっていることがあげられる。次節では、R地区において送金による「負の影響」が目立った形で顕在化しない理由について、ドミニカの人びとの価値観や規範意識とのかかわりから見ていきたい。

3.2　送金から浮かびあがる地域社会の論理

多くの移民送りだし社会で、「送金腐敗」と呼ばれる現象が報告されているにもかかわらず、ドミニカの地域社会において同様の現象がみられないのは、カネの稼ぎ方と個人が富の独占することを許さないという規範意識の存在があげられる。

R地区出身の移民のなかには、アメリカでドラッグを売っているものもいる。彼らからの送金額は週に700 ～ 1,000ドルにのぼり、3年ほどで郊外の富裕層が暮らす地域に豪邸を建てるまでになる。しかし、バリオの人びとは移民社会とのネットワークで彼がアメリカで何をしているかは知っているために、バリオ内の生家を増改築することはできない。妬みや陰口の対象となるからである。とりわけ、R地区のように濃密な人間関係の網の目が張り巡らされている地域において、ひとつの家族だけが群をぬくことは許されないのである。ここで、送金に対する考え方がうかがえる話を紹介しておきたい。

事例2　嫉妬ぶかい人たち

アルタグラシア（24才、女性）は18才のときに結婚したが、2年前に夫をバイク事故で失い9才になる娘を連れて実家に戻ってきた。いまは母親と継父、弟とふたりの異父妹とともに暮らしている。父親は彼女が8才のときにボストンに渡った。父親からは毎月100ドルの送金があり、継父が建設現場で働いた収入とあわせてなんとか生活をやりくりしている。隣の家にはオバ（母親の妹）が、同じバリオ内にもふたりのオバ（母親の姉と妹）家族が暮らしており、困ったときにはコメやプラタノ（食用バナナ）などの食材を分けあってい

る。送金がもっと多ければ助かるのではと質問したところ、「ボストンの暮らしはお金がかかるから、これ（100ドル）以上は無理みたい」との答えが返ってきた。それに続けて、「もし、ドラッグを売れば別だけど、そしたら今度は私たち家族が、ここで暮らせなくなるわ。*chismosa*（噂好き）の*celosa*（やきもち焼き、嫉妬ぶかい）が多いから」と教えてくれた。「パパはそういうのを知っているから、絶対にドラッグなんて売らないわ」（2009年1月）

この言葉からは、バリオの社会関係を維持することの大切さや個々の世帯ではなく地域全体で互いに支えあう暮らしぶりが伝わってくる。また、長くボストンに暮らす父親もおなじような意識を保持していることがうかがえる。

事例3　自律への矜持

エル・エレクトリコ（52才、男性）は、電気工事の職人である。妻（28才）の父親は1997年にメキシコ経由でボストンに渡り、すでに市民権を取得している。年に1度、帰郷する彼とは同世代のよしみで友人のように接しているという。「頼めば毎月100ドル程度の送金はしてくれるだろうが、そうはしたくない。毎日、電気工事の仕事があるわけではないが、腕一本でなんとか食べていけるうちは誰かに頼ろうとは思わない。もちろん、家族が入院したりといった問題があったときには電話で送金を頼んだこともあるけれど、そうじゃなければ、自分でなんとかする。だけど、年々、状況はまずくなってきてるのも事実だよ。この国の人口の80％は貧困層で、たった20％の富裕層にカネを吸いあげられてる。政治家、経営者、公務員……みんな*ladron*（泥棒）だから、*moja la mano*（濡れ手で粟をつかむ）のがうまくて、いくら汗水たらして働いても全部もっていかれてしまう。ドミニカじゃ、そういうのを*trabajo fantasmo*（幽霊みたいな仕事）って言うんだよ。いいかい、この国じゃ、そういう仕事で稼いだカネは*dinero sucio*（汚いカネ）と呼ばれて、人前で堂々とできないけど、反対に真面目に働いて稼いだカネは*dinero limpio*（きれいなカネ）といって、胸をはっていられるんだ。俺はアメリカに頼らずに生きていけた時代を知ってるから、これからも、送金に頼らずになんとかやっていくつもりだよ」（2011年2月）

このように、年配の人のなかには現在の社会環境を批判しつつも、かつてのように移民からの送金に頼らずに生きていこうとするものも少なくない。また、ふたりの語りからは稼ぎ方をめぐる規範意識が、いかに根強くコミュニティの成員に共有されているかがわかる。地域社会の伝統的な規範意識が、ひとつの家族だけが突出する状況を未然に防ぎ、コミュニティ内に格差が拡大することを回避する力学としての役割をはたしているのである。

とはいえ、近年のドミニカを取り巻く経済状況は厳しく、景気に左右されやすい建築労働者の多いR地区では、移民からの送金がないと生活することができなくなりつつある。次節では、故郷の人びとが伝統的な規範意識を根拠にして、一時帰国する移民とのあいだで実践する相互交渉に注目しながら、移民送りだし社会の特徴を見ていきたい。

3. 3　故郷の人びとが生みだす「ドミニカンヨルク」

ボストンとドミニカ双方のコミュニティで調査をおこなったレビットは、移民による影響をうけた故郷のコミュニティの変容を「社会的送付（Social Remmitances）」という概念で分析した。「社会的送付」とは、移民先コミュニティから出身コミュニティにもちこまれる価値観や習慣、アイデンティティ、社会関係資本のことである（Levitt 2001: 51）。これは、移民からの電話、

手紙、facebook、または一時帰国の際に、故郷の家族や友人にアメリカでの生活を語る会話を通して伝達されるという。だが、第2章でも述べたように、レビットの考察は移民からの影響を強調しすぎた結果、伝統的な地域社会の価値観は変化する（変化しない）対象として位置づけられ、非移民の人びとがその価値観を利用して実践する移民との相互交渉の実態については考察の対象にならなかった。ベルトベックが指摘するように、これまでのトランスナショナショナリズム研究は、送りだし社会の人びとの価値観や実践、あるいは移民へのイメージが移民にどのように影響を与えているかという点を見過ごしてきたのである（Vertovec 2004: 974–976）。

しかしながら、アメリカに渡った移民にも地域社会の伝統的な価値観は根づいていることを考えると、故郷の人びととのあいだでおこなわれる文化を通じた相互交渉にも注目すべきであろう。こうした批判を受け、レビットもランバ・ニエベスとの共著論文のなかで、「社会的送付」が移民先から送りだし社会へと一方向に向かうものではなく、双方の社会のあいだで還流するものと修正を加えている（Levitt and Lamba-Nieves 2011: 18–19）。ここでは、移民の一時帰国を事例に、移民と故郷の人びとの相互交渉の一端を見ていきたい[10]。

ドミニカでは、アメリカに暮らす移民を*Dominicanyork*（「ドミニカンヨルク」）と呼ぶ。ドミニカ人を表す英語とニューヨークを意味するスペイン語の一部をあわせた造語であるが、ここにはドミニカの人びとの移民への憧れが投影されている。この言葉に込められるイメージは、故郷に一時帰国する移民のふるまいからきており、いまでは実像を離れてステレオタイプ化されている。ここでいう「ドミニカンヨルク」とは、帰国の際にたくさんの土産物を抱えて、ポケットは100ドル札で溢れかえっているというものである。100ドル札は大袈裟であるにしても、実際、金のネックレスやブレスレット、時計、ピアスといった装飾品で着飾るのが好きなドミニカ人の特徴をニューヨークに重ねあわせた言葉である。

移民はクリスマスやセマナ・サンタ（イースター）の休みを利用して一時帰国することが多く、2～3週間のあいだドミニカに滞在する。滞在中は、家族や友人と海や川に出かけ、親類を訪ねる。その際の費用はすべて「ドミニカンヨルク」が支払うことになる。ここで、ある「ドミニカンヨルク」の帰郷中の生活をとりあげて、故郷の人びとの反応とあわせて考察していきたい。

事例4　ドミニカンヨルクの帰還

空港まで迎えに来た弟が運転する車で生まれ故郷のバリオに向かうトニー（35才、男性）の顔は、やや緊張しているように見える。8年間、夢にまでみた故郷のバリオがもう手の届くところにある。バニの市街地にこぎれいな商業ビルが建てられているのを複雑な気持ちで眺める。運転席の弟に「*pica pollo*（中華料理店）なんかなかったよな[11]」と聞きながら、その目はどんな変化も見逃すまいというように、あちこちに視線を送っている。R地区に近づくと、すれ違うバイクを運転する男たちから次々に声がかかる。「コーニョ！トニー」すかさず「モジェ！　元気か？」と叫びかえす。とうとう帰ってきたのだ。8年前とほとんど変わらない*calle*（通り）に差しかかる。近所の住人が自分の顔を見て、笑顔になるのがわかる。家のまえに到着すると、妹のイングリンが飛びだしてきた。「トニー！」と言ってきつく抱きしめられた。イングリンの4人の子どもたちが、「ティオ（おじさん）」と言ってまとわりついてくる。ひとりずつにキスをして（長女以外は、生まれていなかった）、ようやく家のなかに入る。居間の壁に飾られてある5年前に亡くなった母親の写真が目に飛びこんできた瞬間、こらえていたものが溢れだした。葬式にも帰ることができなかった当時のことが

思いだされたのだ[12]。父親と90才近くになるはずのやせ細った祖母をそっと抱きしめると、ようやく椅子に腰をおろした。

弟が車からスーツケースと段ボール箱を家のなかへと運びこむ。なかには、家族・親類・友人へのお土産が詰まっている。ふたりの妹とそれぞれの夫と子ども、弟夫婦、ふたりのオジと3人のオバ、3人のイトコに4人のコンパドレ[13]。あらかじめ何がいいかは、電話でイングリンに聞いて、教えられたとおりのものを買ってきた。これまでも何度かボストンから服を送ったことはあるが、今回は量が多くて大変だった。それぞれに名前とメッセージを書いて、サイズや色を何度もイングリンに電話で確認した。服、靴、サンダル、腕時計、サングラス、香水、携帯電話、パソコン。これに、R地区出身でボストンに住んでいる友人から預かった土産をたすと、段ボールはすぐに一杯になった[14]。

同じバリオに住む妹が子どもを連れて顔をだす。コンパドレや幼馴染みも次々に挨拶にくる。あまり親しくないものは、挨拶だけして帰っていく。ボストンに住む友人から預かった土産を受けとりに、家族がやってくる。携帯電話に保存している写真を見せながら、ボストンでの様子を話して聞かせる。雪のなかでコートにくるまっている写真や車の運転席に座っている写真を見せると、みんなが興味深げにのぞきこむ。ボストンでどんな仕事をしてるの？　などの質問に答えながら、自分もこのバリオの様子についてたずねる。こうした会話を最後のひとりが帰るまで何度か繰りかえした。（2011年1月）

これは、移民としてボストンに暮らすトニーが8年ぶりに故郷に帰ってきた日の様子である。ここからは、移民が「ドミニカンヨルク」という故郷の人びとのイメージを裏切らないように、ふるまっていることがわかる。また、トニーが用意をしたたくさんの土産物をバリオの人びとは、貰うのが当然といったように受けとったり、様子をさぐりにきていることがうかがえる。あくる日から、トニーは家族や親類と海に出かけたり、友人とコルマドに飲みにいくなどバリオの人びととの時間を過ごした後、ボストンへと帰っていった。

こうした光景は、移民が故郷に帰った際に見られる一般的なものであるが、毎年帰郷する移民は、はじめて帰郷した移民に比べ、土産物やバリオの人びとへのふるまいは限定的である。しかし、なぜここまで過剰に「ドミニカンヨルク」は分け与えなければいけないのか。その理由を、帰郷しているあいだの「ドミニカンヨルク」のふるまいに対するバリオの人の反応から見ておこう[15]。

事例5　周囲の視線

アルベルト（38才、男性）はMLBのマイナー選手としてアメリカに2年間滞在した経験をもっている。今回、彼はトニーの滞在中に1度だけ一緒に酒を飲んだ。R地区の人びとに限らず、ドミニカでは週末にしか酒を飲まない。また、家で飲むよりもコルマドで大音量の音楽とともに、男女で踊りながら酒を飲むのが一般的である。アルベルトは、クリスマスやセマナ・サンタ以外で平日に酒を飲むのは、ドミニカンヨルクが凱旋したときだという。「ドミニカンヨルクはたまには故郷に帰ってきて、*vaciron*（散財／豪遊）しないといけない。で、アメリカに帰るときは、身につけているものを全部周りの連中にあげて帰る。それがドミニカンヨルクのやりかただ」と語る。その理由をたずねた私に、ドミニカでよく使われる格言をひきながら説明してくれた。それは目にものもらいができた相手に言う格言で、「ものもらいができたのは、妊婦と一緒にご飯を食べているときに、彼女がもの欲しそうな目をしておまえを見つめる視線に気づかなかっ

たからだ」というものである（なにかを欲しそうな顔をしている人には分け与えないと罰があたるという意味）。「だからカネをもっているドミニカンヨルクはみんなに気前よく分け与えないといけないんだ」と教えてくれた。そして、自分もプロ野球選手だった頃、帰郷した際には同じようにふるまったため、バリオの人からはアルベルト・トーマ（*toma*：与えるという意味のスペイン語）と冗談まじりに呼ばれていたという。つまり、ドミニカでは他人にたかるのは恥ずかしい行為とされているために、欲しいものがあっても口にはできない。カネをもっているものは、周囲の人びとの表情や行動から察して分け与えないといけないというのである。（2011年1月）

これらふたつの事例からは、「ドミニカンヨルク」の帰郷がバリオの人びとにとって、非日常的な経験となっており、日常的な規範から逸脱して、土産物をたかることがバリオ内でも許容されていることがわかる。一方の「ドミニカンヨルク」には、ステレオタイプ化されたイメージを裏切らない「気前のよさ」が求められ、当人もまたその役割をはたすように努めているのである。さらに重要なのは、相手のもの欲しそうな視線に気づかなければいけないという点である。ブラジルでの邪視について考察をおこなった奥田は、「貧困地域では、邪視をめぐる出来事は日常生活の一部として、他者との関係の中に立ち現われる」と述べる（奥田 2008: 129）。これをドミニカの文脈におきかえると、ドミニカンヨルクは、社会に埋めこまれた二重の規範（①富の独占を許さない、②たかりは恥である）に従い、自分と相手との関係性をふまえたうえでの行動を求められているのだということができよう。

このように考えると、ドミニカの人びとがアメリカに暮らす移民を「ドミニカンヨルク」というイメージでステレオタイプ化してきたことも理解することができる。移民からの毎月100ドルの送金によってなんとか生活を送れているバリオの人びとは、アメリカに暮らす家族がドラッグを売っていればもっと豊かな生活が送れると考えることもある。しかし、同時に移民社会とのネットワークでそうした行為はすぐに露呈し、バリオじゅうから非難を浴び、引っ越しを余儀なくされることも知っている。また、個人が富を独占することを許さないという規範が存在する一方で、他人にカネをたかることは、恥ずべきことだというもう一方の規範の存在が箍（たが）となって、たかることもできない。そうしたジレンマを回避するために、ドミニカの人びとは伝統的な価値観を材料にもちいて、移民を「ドミニカンヨルク」というステレオタイプに仕立てあげたのである。移民もドミニカンヨルクに込められている規範や価値観を内面化して育っているために、国際電話やfacebookなどのやりとりのなかで、その役割を演じるようになっていく。いいかえるならば、故郷の人びとと移民との相互交渉を通じて、移民の送金や帰郷時のふるまいが規定されていくのである。これは、予測不可能で不安定な現代という時代を生きぬくためのドミニカの人びとの生活戦略のひとつなのだといえよう。

しかしながら、「ドミニカンヨルク」はそもそも実体としては存在せず、事例でみたように、毎年、定期的に帰郷する移民はそれほど「気前よく」ふるまえるわけではない。それは、非日常的であるかどうかが「気前のよさ」にも影響するからである。もちろん、従来から移民研究のなかで言及されてきたように、移民による送金や帰郷時の「気前のよさ」は、将来の利益を勘案して戦略的に選択されているとも考えることは可能であろう。しかし、R地区出身の移民のほとんどは、給料から故郷への送金額をひくと必要最低限の生活費しか残らないという毎日を送っており、故郷に家や車を購入する余裕などない[16]。そのようなことを考えると、移民の「気

前のよさ」は、故郷に蓄積した財産を守るための保険のような意味あいからくるものではなく、伝統的な規範や価値観の存在に非日常性が加味された結果、彼らの「気前のよさ」がひきだされている（あるいは演じている）と捉えるのが自然であろう。同様に、普段はアメリカで暮らす家族に高額の送金を要求しないR地区の人びとも、入院や密航費用といった非日常的なケースでは送金を依頼していることからもうかがえる（事例1、3、5）。

とはいえ、トニーのように何年かぶりで帰郷する移民は、1年にひとりいるかどうかというのが現実である。そこで、次章では、つねに「ドミニカンヨルク」を必要としている人びとが、新たな移民として、野球選手を生みだすようになった過程をみていくことにしたい。

4.「野球移民」の誕生

4.1　MLBのリクルート・システム

ドミニカに野球が伝わったのは19世紀後半とされている（Ruck 1991）。独立戦争に敗れ亡命してきたキューバ人によって紹介された。サトウキビ農場での娯楽として普及し、アメリカによる軍事介入（1916～24年）や独裁政権下（1930～61年）で全国に拡大していく。1956年にはじめての大リーガーが誕生すると、キューバ革命後の選手供給地としてMLBの注目を集めるようになっていく。1976年にMLBでフリー･エージェント（FA）制度が導入されると、ドミニカでの選手獲得競争はますます活発になり、MLB球団はアカデミーを設置して、より効率的なスカウト活動をするだけではなく、球団の基準を満たす選手を育成するようになったのである。

表1からもわかるように、各球団がドミニカにアカデミーを設置しはじめる1980年代以降、MLBで活躍するドミニカ出身選手が急増し、現在ではアカデミーを頂点としたリクルート・システムが定着している。ここでは、実際にどのように選手が発掘され、アメリカへと送りだされているのかを概観しておきたい。

現在、日本のプロ野球球団である広島東洋カープと大リーグ30球団がドミニカにアカデミーを置いている。アカデミーはマイナー・リーグのなかの育成リーグという位置づけで、各球団には40～60人の選手が在籍している。選手たちは、ドミトリー形式の宿舎に寝泊まりし、野球漬けの日々を送るが、野球の練習以外に栄養たっぷりの食事があたえられ、ジムでのトレーニングや英語の授業が用意されている[17]。

このアカデミーの特徴は、ラテンアメリカの選手発掘・養成施設としての機能をもっていることである。いくつかの球団は、ベネズエラ、パナマ、ニカラグアなどにもアカデミーをもっており、そこで発掘した有望な選手をドミニカによび寄せ、ドミニカ人選手と競わせるのである。こういった形態は、まさに現代のトランスナショナルな経済活動の究極の姿だということができる。現地で安価な原材料（少年）を調達し、工場（アカデミー）で会社（球団）が選別し、加工を施し（コーチング）、アメリカの基準にあった製品（選手）だけを送りだしているからである（窪田 2006: 18）。

先述のように、アカデミーはマイナー・リーグ組織に属するため、契約金が発生し（平均27,000ドル：約270万円）、サマー・リーグ期間中は給与（750ドル：75,000円）も支払われる。貧困層の平均的な月収が5,000～8,000ペソ（15,000～24,000円）であることから、少年たちにとってのアカデミーは、大リーガーへの登竜門というよりは、まずは契約金を手にする場所として認識されているのである。

その少年たちが練習をしているのが、ドミニカのどのバリオにもひとつはあるとされる野球場である。R地区では、月曜～金曜日までの朝と夕方に、それぞれ別のコーチのもとで練習をおこなっている。少年たちの年齢層は14～19才くらいまでで、教えているのは元マイナー選手やアマチュア野球をやっていたバリオの人物で

ある。月謝のようなものはない代わりに、少年がアカデミー契約を結んだ際に、契約金の25％程度を謝礼として受けとることになっている。このようなシステムから、彼らはコーチではなく、*buscon*（ブスコン：探す人）とよばれている。ブスコンは、日頃からアカデミーのスカウトと頻繁に連絡をとって、練習を見にきてもらうように自分の選手を売りこむ。

スカウトが野球場に来ると、その場で簡単なトライアウトが開かれる。野手ならば、ホームから1塁ベースまでの走る速さと打撃、守備をチェックされる。投手ならば、スピードガンを使っての試験がある。スカウトが興味を示した場合は、アカデミーでおこなわれるトライアウトの日程が告げられるという流れになっている。バリオに暮らす人びとは子どもがアカデミーと契約することを期待する。そのように期待できるほど身近にはアカデミー契約を結んだ少年が数多く存在しており、1979年にこのバリオが誕生してから2012年のあいだに、19人のプロ契約選手が誕生している[18]。

では、このように多くのプロ契約選手を生みだす社会において、野球がもつ意味とはどのようなものであろうか。その問いに答えるために、野球と地域社会との関わりについてみていくことにする。

4.2　ドミニカの人びとにとっての野球

ドミニカ社会と野球との親和性についてはすでに別稿で論じているが、ここであらためてドミニカの人びとにとっての野球の意味について述べておきたい。ドミニカの人びとにとって野球が特別な意味をもっているのは、人びとの野球に対する熱狂的な関わり方から見てとれる。前節で述べたように、ドミニカ全土のバリオには野球場があり、そこで開かれる野球教室には毎日少年たちがやってくる。また彼らを大リーガーに育てようとする組織化された制度などがその例である。大リーグのシーズン中は、毎日のようにテレビ中継がなされ、街角にある政府公認の野球賭博場は昼間から人が絶えない。冬には、凱旋帰国した選手が出場する国内リーグも開かれる。こうした環境が、新たな野球選手を再生産し続けるベースとなっているが、ここで重要なのは野球がカネを稼ぐ手段として人びとに認識されていることである（窪田 2012: 34–35）。

毎年2月には、バニ市主催の*interbarial*（バリオ対抗の野球リーグ）が開催される[19]。出場するのは、アカデミー契約をめざして毎日練習に励んでいる14 ～ 20才くらいまでの少年たちである。バニ市内のバリオがそれぞれ代表チームを結成し、総あたりのリーグ戦を実施する。アカデミー契約をめざす選手が出場することからレベルも高く、多くの観客に混じってアカデミーのスカウトも足を運ぶほどである。試合中には観客のあいだで賭けがおこなわれ、その方法も試合の勝敗だけではなく、打席ごとの投手と打者の対戦結果やホームランの数にいたるまで細かく賭けられる。かつて、このリーグにR地区代表として参加したジョニー（30才）は当時をふりかえって次のように語る。

事例6　緊張の最終打席

当時のR地区代表チームは敵なしだった。なんせ代表メンバーには、数年後に大リーガーになるテハダとルイス・ビスカイーノがいたんだから。ほかにも俺やアルベルトみたいにアカデミーと契約する選手もメンバーだったし、ほんとうに強かった。いまでも忘れられないのが、リーグ戦最終日で勝ったチームが優勝という試合で、9回裏同点で打席に立ったときのこと。観客席は純粋にチームを応援する声より、勝敗や俺がホームランを打つかどうかを賭けている人の怒号がすごくて心臓がバクバクしたよ。おまけに、恰幅のいい金持ちそうな初老の男性がグラウンドに降りてきて、1,000ペソ（現在の価値で8,000円程度）を

ホームベースの下に置くと、「ホームまで帰ってこられたら、おまえさんのものだよ」っていうから、緊張どころじゃなくなった。まだ16才だったし、はじめてリーグ戦のメンバーに選ばれたばかりだったし、余計にね。打った瞬間のことは覚えてないけど、なんとホームラン。次の日からはしばらく昼食に肉がでるようになったよ。(2008年9月)

この事例は、野球がカネを稼ぐ手段として人びとに認識されていることを示す典型的なものである。この事例以外にも、先述のように街中には政府公認の野球賭博場があり、少年に先行投資をして、アカデミー契約後に高額の謝礼をうけとるブスコンがいるといったように、野球はカネを稼ぐためのものであることがわかる。では、ドミニカの人びとは野球で稼ぐことをどのように捉えているのであろうか。次に、プロ契約選手の語りからみておこう。

事例7　きれいなカネ

同じ3,000ドルでも、手に入れた方法によって世間の見方が違ってくる。もし、ドラッグを売ったカネで家や車を買うと、ずっとまわりの陰口を気にしなければならない。でも、野球で稼いだカネなら、隠さずに堂々としていられる。まわりも素直に祝福してくれる。それが、*dinero limpio*(きれいなカネ)だ。(2009年1月)

この語りは、バリオではじめてのプロ契約選手で、現在は子どもたちに野球を教えているチーボ(46才)のものである。彼は、アメリカで2年間プレーしていたが、シーズン・オフになるとスーツケース2個分の野球道具をバリオの子どもたちのために持ちかえってプレゼントしたという。引退後、友人と一緒に小学生相手の野球教室をはじめる。テハダがオークランド・アスレチックスのトライアウトを受けにいく際、貧しくてスパイクやグローブをもっていなかったために、貸してあげたというエピソードを語り、その時、テハダは直接借りにくるのが恥ずかしくて、代わりに兄が家にやってきたのだとのことだった。

事例8　母親の想い

2008年11月にピッツバーグ・パイレーツと3,500万円でアカデミー契約を結んだエル・メノール(17才)は、4人兄弟の次男として、近隣のバリオであるビジャ・マヘイガで生まれた。彼が5才のときに父親は家を出ていったので、子どもたちの世話を同居する母方の祖母にまかせ、母親(45才)が働きに出て家計を支えた。ソーナ・フランカ(フリーゾーン)でのライン仕事やトマト・ソースの缶詰を作る工場で朝から夕方まで働いても、週に500ペソ(1,500円)にしかならない過酷な生活だった。

エル・メノールは、毎日野球場に通い14才の時に、本格的にアカデミーをめざすために、ブスコンのもとで練習をはじめた。祖母が口癖のように「まっすぐに生きなさい」と言うのを聞いて育ったので、どんなに練習が辛くても野球を辞めようとは思わなかった。毎日、疲れきって帰ってくる母親をはやく楽にさせてあげたいと、それしか考えなかった。長男は18才になるとすぐに、首都でバスの車掌をはじめて家計を助けるようになって、少しだけ生活が楽になった。2年前に、バリオ対抗戦で活躍するエル・メノールをみた首都のブスコンから声がかかる。首都のブスコンの家に寝泊まりしながらの、野球漬けの日々を過ごした。足も速く、何人ものスカウトから声をかけられていたので、いつかアカデミーと契約できるかもしれないと思ってはいたが、まさかこんなに高額の契約を結べるとは想像もしていなかった。契約金の40%にあたる1,400万円を首都のブスコンに渡して、手元に残っ

た2,100万円でボロボロだった家を改装し、兄にマイクロバスを買い、自分用に50CCの単車を買い、残りはすべて母親に渡した。母親は、すぐに神への感謝の気持ちを捧げるために*palo*（パロ）[20] とよばれる儀礼を開き、親類や近所の住民、そして友人を招待した。

母親は、自分が工場で働いて稼いだカネと同様に、エル・メノールが野球で手にした契約金も*dinero limpio*（きれいなカネ）だと言う。反対に、ドラッグを売ったり、泥棒をしてカネを手にしたら、誰も信じられなくっていつも怯えてないといけないし、早く使い切らなきゃと落ち着かないと思うわとつけ加えた。（2008年12月）

ここまでをまとめると、ドミニカでは人びとのあいだで、1）野球がカネを稼ぐ手段であること、2）野球で稼いだカネはきれいなカネだと認識されていることがわかる。また、事例8のケースのように儀礼を通じて、バリオの人びとは誰がアカデミー契約をしたかを知ると同時に、野球に対して特別な意味が付与されていることが明らかになった。いいかえるならば、ドミニカの人びとにとって野球が特別な意味をもっているからこそパロを催すのであり、地域社会のなかから野球選手が誕生するたびにその意識は更新されつづけるのである。

このような野球をめぐるドミニカの人びとの認識からは、野球がドミニカの人びとの心の領域にまで深く根づいていることがわかる。それを象徴するのが野球を呼びあらわす表現である。ドミニカでは、野球を*beisbol*（英語の*baseball*から生まれたスペイン語で、新聞などはこちらを採用している）ではなく、*pelota*（ペロータ：ボールをあらわすスペイン語）と呼び、野球選手のことも同様に、*beisbolista*ではなく、*pelotero*（ペロテロ）と呼んでいる。この言葉には、これまで述べてきたドミニカ人の野球に対する想いと、アメリカ起源のベースボールを独自のペロータとして受容してきた歴史が凝縮されているのである。

次節では、これまでにみてきたペロータのふたつの性質（①カネを稼ぐための手段、②きれいなカネ）に加えて、そのカネの使いかたを大リーガーのバリオとの関わりに焦点をあて、一般の移民との比較をおこないたい。

4.3　大リーガーによる分配

大リーガーの獲得年俸は膨大な金額にのぼり、R地区出身のテハダの場合、毎年、1億円近い金額をバリオの人びとに分配している（窪田 2006, 2014）。年俸10億円以上を稼ぐテハダは、父親と11人の兄弟姉妹にはじまり、拡大家族の成員すべてに送金をおこなっている。バリオに対しては、カネを直接分配するのではなく、宗教行事にあわせて分配されるのが特徴である。ここでは代表的な事例を四つあげておきたい。ひとつめは、クリスマス・プレゼントである。毎年、クリスマス・イブの日に、バリオすべての世帯に食料品のはいった袋を配る。なかには、鶏肉、スパゲティ、小麦粉、カップラーメン、砂糖、コーンフレークなどが大量につまっている。これを大リーガーになった1997年から毎年欠かさずにおこなっている。ふたつめは、トラック2台分のおもちゃを*Dia de Reyes*（子どもの日）に配っていること。三つめは、*Patronales*（パトロナレス：守護聖人の祭り）の開催資金を提供していることである。B地区で守護聖人の祭り[21]がはじまったのは10年ほど前のことである。この地区の揺籃期を支えた修道女を称えるために、7月初旬に開催されるようになった。10年前は、テハダが大リーガーとしての地位を確立し、さらにもうひとりの大リーガーがこの地区から誕生した時期であった。四つめは、バリオに野球場を建設したことである。野球場は2004年のクリスマス・イブに完成し、完成披露式で挨拶にたったテハダは、「大リーガーになったその日から、バリオのために恩返しをすることを考えてきた。ほん

とうに子どもの頃にはバリオのために何かできるなんて考えもしなかった。でも、神様が大リーグでプレーする機会を与えてくれたおかげで、自分のバリオのためにプレゼントをするのに十分な収入を得ることができた。ここからはじまり、ここからまた続いていく。ロス・バランコネス（R地区）、心から愛していた。ありがとう。どうぞうけとってください」と涙をながしながら語った。野球場建設の費用は日本円にしておよそ4,800万円であった（窪田 2006: 29）。

このようなテハダの分配行動を規定しているのは、これまでみてきたペロータの性質（①カネを稼ぐための手段、②きれいなカネ）とバリオの人びとに共有されている社会に埋めこまれた二重の規範（①富の独占を許さない、②たかりは恥である）の存在である。さらに重要なのが、一般の移民のケースとは異なり、その送金が地域社会（バリオ）全体にゆきわたるのに十分な金額だということである。ここで注意が必要なのは、この両者の違いは、野球選手が特殊な存在であることを示すものではなく、むしろ地域社会の人びとが移民との相互交渉の過程で生みだしてきた「ドミニカンヨルク」と連続性をもった新たな移民像の誕生として捉えるべきである。それがドミニカの人びとが「ペロテロ」と呼ぶ野球選手であり、私が「野球移民」と呼ぶ人たちなのである。

ドミニカの人びとは、「ドミニカンヨルク」と連続性をもった存在である「ペロテロ」に、前者に投影した地域社会の規範や価値観に加えて、地域社会全体を救済する役割を担わせたということができる。そのように考えると、クリスマスや守護聖人の祭りといった宗教行事にからめるかたちで分配することは、「ペロテロ」の側からの回答であり、またその行為によって「聖性」が付与され、「ペロテロ」のイメージがより強化されていくのである。

野球選手を移民として捉える必要があるのは、このような野球選手の分配行動が、「ドミニカンヨルク」の分配と同じく、移民と故郷の人びととの相互交渉のなかから生まれてきたものだからである。その相互交渉を支えているのは、移民や野球選手も内面化している地域社会に伝統的な価値観や規範意識なのである。多くの移民を送りだし、彼らからの送金によって生活をしてきたドミニカの人びとは、移民を自分たちの生活戦略のために利用する術を身につけてきた。それが、虚像ともいえる「ドミニカンヨルク」像を創りあげることに繋がり、さらには野球選手を「ペロテロ（野球移民）」として仕立てあげてきたのだった。

5. おわりに

本稿では、ドミニカの移民送りだし社会としての面に注目し、トランスナショナルに展開する移民と故郷の人びととの相互交渉に注目し、そのなかから誕生した「ドミニカンヨルク」というイメージにドミニカ社会のどのような価値観が投影されているかについて論じてきた。

トランスナショナルな現象を扱う先行研究では、故郷の人びとを移民からの影響を一方的にうける（うけない）対象として捉えられてきた。しかし、「ドミニカンヨルク」の事例を通して明らかになったように、故郷の人びとは移民からの送金に依存して「送金腐敗」に陥っているわけでもなく、バリオ内に格差が拡大しかねない送金を黙って許容していたわけでもなかった。むしろ、普段は必要最低限の送金でなんとか生活を送り、バリオ内に格差が拡大しないような節度あるふるまいをしているということだった。そうした実践（あるいは矜持）を支えているのが、地域社会の伝統的な規範意識や価値観である。

しかしながら、現在のドミニカをめぐる経済状況は厳しく、より多くの送金を受けとりたいというのがバリオの人びとの本音であることも事実である。そうした状況のなかで、年々増え続ける移民に対して、一時帰国の際に華美で散財のかぎりを尽くす「ドミニカンヨルク」とい

うステレオタイプ・イメージを創りあげ、国際電話やfacebookといったトランスナショナルな相互交渉を通して、移民にも「ドミニカンヨルク」像を演じさせることに成功したのである。さらに、こうした「ドミニカンヨルク」像に地域社会全体を救済する役割を加え、野球選手に担わせることによって、今度は「ペロテロ（野球移民）」という「聖性」を帯びた虚像を誕生させることに繋がったのである。

こうしたステレオタイプ・イメージの創出が可能となったのは、移民と故郷の人びとが地域社会の伝統的な規範意識を共有していたからであるが、二国間をまたぐこうしたトランスナショナルな相互交渉は、伝統的な規範意識や価値観を武器に、新自由主義が蔓延する予測不可能で不安定な社会を生きぬくためのドミニカの人びとの生活戦略のひとつなのである。

注

1）ただし、彼女の移民願望を駆りたてる要因はひとつではなく、ボストンに暮らすイトコの存在や、友人がアメリカへと渡ったことなど、複数の要素が重なっていることを忘れてはならない。

2）ドミニカ移民のなかには非正規滞在者が多く国勢調査に協力しないものも多く、実数の把握は困難である。しかしながら、2000年の国勢調査結果ではアメリカ在住のドミニカ人は764,945人であるが、エルナンデスらは以下の理由と方法から実数の推定をおこなっている。まず、国勢調査の質問項目が1990年においては、メキシコ／プエルト・リコ／キューバ／その他のスペイン系もしくはヒスパニック系／その他／に項目が分かれており、最後の「その他」項目の下に、「アルゼンチン、コロンビア、ドミニカ、ニカラグア、エル・サルバドル、その他」という国名例が標記されていた。2000年調査時には、1990年と同じ項目に加え「その他」を選んだ者が、自分の出自を書き込めるように変更されると同時に、1990年には標記されていた国名例がなくなったために、「その他」を選んだ人びとのなかで、書き込みをしなかった者が多数発生した。このため国勢調査結果のドミニカ人数が正確な数字を示していないと判断し、「その他」を選んだ人のなかで、出生地をドミニカと記入した人と二世代前までの祖先がドミニカ人であると記入した人を加えて実数を出している（Hernandez and Rivera-Batiz 2004: 31–33）。

3）ラファエル・トルヒージョは1891年にサン・クリストバルの郵便局員の家に11人兄弟の4番目として生まれた。その後、砂糖プランテーションの警備員を経てアメリカ占領下で創設された国家警察に入る。その後、大佐となった彼は1928年にドミニカ国軍と名称の代わった組織で参謀長に就任する。大統領選挙で、軍の圧力で得票を集め1930年大統領に就任し、1961年5月31日に暗殺されるまで独裁政治をおこなった（Wiarda 1969）。

4）アメリカに渡るためにドミニカ人が申請するのは、短期滞在査証かツーリスト査証である。申請書が提出されるとドミニカ人を使って、申請書類に虚偽がないかを内偵調査をする。そのため、近年では虚偽の書類を使った申請は減る傾向にある。

5）ペッサールは結婚ビジネスを利用して滞在資格を得た経験者の話から、1970年代で2,000ドル（20万円）が必要だったと記述している（Pessar 1995: 12）。

6）このときの渡航費はR地区出身の大リーガーであるミゲル・テハダが負担した。

7）自国の産業が未発達ゆえに、海外移住と先進国からの経済援助に依存する国家運営に対して、経済学者はMIRAB経済ないし社会と定義され、移住（migration）、送金（remittances）、海外援助（aid）、官僚制（bureaucracy）の頭文字からなる造語とされている（須藤 2008: 5）。

8）バリオの通りごとにある雑貨屋。日本のコンビニよりも品揃えは豊富で、肉や野菜なども売っている。酒専門のコルマドは、音楽をながす巨大なスピーカーを備えていて、週末には大勢の人でにぎわう。

9）ドミニカの地方都市では正式な婚姻関係（教会や市役所）を結ぶカップルは少なく、事実婚が多くを占める。また、離婚率が高いために、父親や母親が異なる兄弟姉妹が一般的である。なお、離婚後も父親は子どもの養育費を払いに定期的に別れた妻の家に顔をだす。

10）たとえば、ほとんどの女性がドミニカとボストンでの暮らしの違いについて、夫が外でほかの女性と過ごさずに家にいることが多くなり、家事や子育てを手伝うようになったと話すのを聞いて、故郷の女性たちが夫との公正な関係を望むようになるという変化が生じているという。

一方、移民が故郷に残してきた子どもたちは、将来アメリカに呼び寄せられることを見越し、教育への関心を失う傾向にあり、学校を中退するものが増加していると指摘する（Levitt 2001: 84–85, 102–103）。

11）ドミニカには台湾系の人びとが多く暮らしており、首都サント・ドミンゴには中華街がある。近年、地方都市にも中華料理店が進出し、ドミニカ人が好むフライドチキンを安い値段で売るために、ドミニカ人の同業者と緊張関係にある。ちなみに、ドミニカ人は中華料理店を「揚げた鶏肉」を意味する*pica pollo*と呼んでいる。

12）トニーの姉のナルダも10年前にメキシコ経由でボストンに渡っている。イングリンは、母親の葬式のときに送金もしてこなかったことを恥知らずだといまだに怒っている。ナルダの息子は、イングリンが面倒をみているが、送金は半年に一度しかしてこないとのことだった。

13）ドミニカではカトリックの習慣により、生まれた子どもの洗礼式をおこなうが、その際に名づけ親（パドリーノ）として両親の友人が数名選ばれる。彼らは子どもの名づけ親であると同時に、両親とはコンパドレという疑似家族／兄弟の間柄となり、以降、親密な関係をもって暮らすことになる。

14）ドミニカ政府は、クリスマス・シーズンにあたる12～1月にかけては入国の際にかかる関税を免除する措置をとっている。これは、移民が帰郷する時期であり、免税にすることで、海外からの土産物を国内にもちこみやすくするためである。

15）ただし、毎年のように帰国するものとの違いは、家族側の歓迎に見られる。トニーの家族は、8年ぶりに帰国できたことに感謝するために、*palo*（パロ）と呼ばれる伝統的な儀礼を開いている。これは、カトリックとドミニカ土着の宗教が混じった儀礼で、人生の成功を感謝するとき、幸運を祈る際などに催される（注20参照）。

16）アメリカの調査地であるペンシルバニア州ヘーズルトンに暮らすドミニカ移民の多くは、食料品のパッキング工場や精密機器を組み立てる工場などで、時給9～11ドルで直接雇用か派遣労働者として勤務している。1,500ドル程度の月収から家賃500ドル、光熱費や食費を差し引くと、故郷への送金は月100ドルが限度である。

17）私が調査をおこなったタンパベイ・レイズのアカデミーでは、英語の習熟度もアメリカに送りこむ選手を選考する基準とされていた。

18）クラインが無作為に実施した調査でも、100人のうち98人までがアカデミー契約を結んだ家族・親戚または友人をもっていたという（Klein 1991: 59）。

19）これ以外にも、6～8月にかけておこなわれる*Liga Campesina*という野球のリーグ戦がおこなわれる。*Liga intelbariar*が市の主催でるのに対し、こちらのリーグは資本家が市単位で有力選手を集めてチームを構成するセミ・プロのようなリーグであり、月に1,000ペソ程度の報酬が支払われることや、市単位での選抜チームのためにレベルは高い。近年では、アメリカに暮らすドミニカ移民がオーナーとなるケースが増えている。

20）西アフリカから伝わった土着の宗教とカトリックが融合したもの。守護聖人の名を連呼しながら、円柱状の太鼓とグイラと呼ばれる楽器を一定のリズムで演奏するのにあわせて踊る。屋内で立錐の余地もないほどの空間で踊りつづけるために、参加者のうち数人がトランス状態となる。開催されるのは、家の新築・改装の祝いや家族のだれかが移民として旅立つ時、あるいは自分が進行する守護聖人の日であるが、近年はここにアカデミー契約が加わる。

21）カトリック教徒が守護聖人に捧げる祭り。それぞれの国、都市、バリオ、個人が異なる守護聖人を拝している。ドミニカの守護聖人はアルタグラシアで、1月21日が守護聖人の日にあたる。この日はアルタグラシアを守護聖人に拝するふたつの都市、イグウェィとオコアに全国から大勢の人が集まる。

参考文献

日本語文献

カースルズ、ステファン・ミラー、M. J.
1996　『国際移民の時代』（関根政美他訳）名古屋大学出版会。

窪田　暁
2006　「越境する野球移民―ドミニカ共和国におけるトランスナショナリズムの一諸相」『ぽぷるす』（神戸大学社会人類学研究会）5: 1–48。
2014　「グローバリゼーションとスポーツ移民」早稲田大学スポーツナレッジ研究会編『グローバル・スポーツの課題と展望』114–128頁、創文企画。

長坂　格
2009　『国境を越えるフィリピン村民の民族誌

—トランスナショナリズムの人類学』明石書店。
奥田若菜
2008 「嫉妬する目—ブラジルにおける邪視と社会格差」『年報人間科学』（大阪大学大学院人間科学研究科）29: 117–131。
サッセン、サスキア
2004 『グローバル空間の政治経済学—都市・移民・情報化』（田淵太一他訳）岩波書店。
須藤健一
2008 『オセアニアの人類学』風響社。
上杉富之
2004 「人類学から見たトランスナショナリズム研究—研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』（成城大学大学院文学研究科）24: 1–43。

英語文献

Bale, John and Maguire, Joseph
1994 *The Global Sports Arena: Athletic Talent Migration in an Interdependent World*. London: Frank Cass.
Brettell, Caroline B. and James, F. Hollifield (eds.)
2000 *Migration Theory: Taking Across Disciplines*. New York & London: Routledge.
de la Garcia, Rodlfo and Lowell, B. Lindsay
2002 *Sending Money Home: Hispanic Remittances and Community Development*. Oxford: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
Georges, Eugenia
1990 *The Making of a Transnational Community: Migration, Development, and Cultural Change in the Dominican Republic*. New York: Columbia University Press.
Grasmack, Sherri and Pessar, Patricia R.
1991 *Between Two Islands: Dominican International Migration*. Berkeley: University of California Press.
Guarnizo, L. E. and Smith, M. P.
1998 "The Locations of Transnationalism". In Smith, M. P. and Guarnizo, L. E. (eds.) *Transnatinalism from below*, 3–34. New Brunswick (U.S.A.): Transaction Publishers.
Hernandez, Ramona
2002 *The Mobility of Workers UnderAdvanced Capitalism: Dominican Migration to the United States*. New York: Columbia University Press.
Hernandez, Ramona and Francisco, Rivera-Batiz
2004 "Dominicans in the United States: A Socioeconomic Profile of the Labor Force". In Rodriguez M. E. and Hernandez R. (eds.) *Building Strategic Partnerships for Development: Dominican Republic-New York State*, 26–75. Santo Domingo: Fundacion Global Democracia Y Desarrollo.
Hernandez, Ramona and Lopez, Nancy
1997 *Yola and Gender: Dominican Women's Unregulated Migration,* pp. 59–78. New York: CUNY Dominican Studies Institute.
Klein, Alan M.
1991 *Sugar ball: The American Game, the Dominican Dream*. New Haven: Yale University Press.
Levitt, Peggy
2001 *The Transnational Villagers*. California: University of California Press.
Levitt, Peggy and Lamba-Nieves, Deepak
2011 "Social Remittances Revisited". *Journal of Ethnic and Migration Studies* 37(1): 1–22.
Maguire, Joseph
1996 "Blade Runners: Canadian Migrants, Ice Hockey and the Global Sports Process". *Journal of Sport and Social Issues* 23: 335–360.
Pessar, Patricia
1995 *A Visa for a Dream: Dominicans in the United States*. Massachusetts: Allyn and Bacon.
Portes, A. and Bach, R. L.
1985 *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*. Berkeley: University of California Press.
Portes, A., Guarnizo, L. E. and Landollt, P.
1999 "The study of transnationalism: pitfalls and promise of an emergent research field". *Ethnic and Racial Studies* 22(2): 217–237.
Ruck, Rob
1991 *Tropic of Baseball: Baseball in the Dominican Republic*. Lincoln and London:

The University of Nebraska Press.
Torres-Saillant, Silvio and Hernandez, Ramona
1998 *The Dominican Americans*. Series New Americans. Westport, conn: Greenwood Press.
Vertovec, Steven
1999 "Conceiving and Researching Transnationalism". *Ethnic and Racial Studies* 22(2): 447–462.
Vertovec, Steven
2004 "Migrant Transnationalism and Modes of Transformation". *International Migration Review* 38(3): 970–1001.
Wiarda, Howard J.
1969 *The Dominican Republic.* New York: Frederick A. Praeger, Publishers.

参考資料

ONE (Oficina National de Estadistica)
2004 Republica Dominicana en Cifras 2004, Santo Domingo: ONE.

参考ウェブサイト

Baseball-reference.com（最終アクセス、2013年9月22日）

The Birth of the Baseball Migrant:

The Process of Creation of the Migrant Image in the Dominican Republic

KUBOTA Satoru

Visiting Researcher/National Museum of Ethnology

Focusing on transnational discursive relations in the Dominican Republic, this article aims to investigate how behavior is symbolized in the process of creating the migrant image of "Dominican York." I further consider how the process of creating this image produced the figure of the baseball migrant.

Dominican emigration has increased substantially since the 1960s, and there are now about two million Dominicans living in the U.S.A. My fieldwork shows that they express a sense of still belonging to their homeland at two levels. The first is by keeping a direct connection through frequent calls to their homeland and sending remittances to their families. The second is reflected in the frequent return trips to their homeland.

The existing studies on Dominican emigration dealing with transnationalism have focused on the unidirectional impact of migrants on their native country by their sending of remittances. However, these studies have paid scant attention to an important aspect of everyday cultural practice in the sending society, that is, the effect of this immigration on morale and behavior in the local community back home. Social conditions in the Dominican Republic, however, remain difficult, and it is still true that local people need to receive more remittances. In the transnational discursive relations, nonmigrants have used local knowledge to create a migrant stereotype image of luxury and ostentation in "Dominican York." In so doing, they have allowed migrants there to perform this role, and this has been a factor in the birth of the baseball migrant.

Here I indicate the process of how a stereotype image has been created through the transnational discursive relations of both migrants and nonmigrants. I will show the Dominican life strategy of survival with local knowledge in the face of a spreading, unstable, and unpredictable neo-liberal world.

Key words: transnationalism, remittance, Dominican York, baseball migrant, emigration